
愛の王国

吉田 料

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の王国

【Nコード】

N6326N

【作者名】

吉田 料

【あらすじ】

5000年後の未来。『同性愛』がノーマルとされる世界で、大学生のリヒト「カツラギは、自分が『異性愛者』であることに悩んでいた。

同じゼミのハヅキ「ヨシカワに思いを寄せるリヒト。

彼の恋は実るのでしょうか？

どしどしヒトくんを応援してください！

第1話 秋風（前書き）

第1話目を割り込ませました。今日この機能に気がきました（笑）

第1話 秋風

好きだ。君が好きだ。

僕は心の中で、彼女に向かってささやいた。

目の前の彼女は、ゼミ仲間との恋愛話に夢中だ。

薄い紫のアイシャドウに飾られた瞳が、うるうるとしている。

「リヒトくんは、今好きな男の子はいるの？」

急に話しかけられたので、僕は反応できず、あ……と呻いてしまった。

好きな『男の子』は居ない。僕が好きなのは、君という『女の子』なのだから。

無理矢理に微笑むと、

「今は居ないよ」

と返答した。

彼女には嫌われたくない。

彼女は興味が無さそうに、そっかあ、と言って、話題を変えた。

「リヒトくんは、卒論のテーマは決まったの？」

「いや、まだだよ。ハヅキさんは？」

彼女は上目遣いでふふつ、と笑うと、答えた。

「私はね、異性愛について研究しようと思っているの」「異性愛？」

僕はかすかに、ビクリ、と体を弾ませた。
彼女に気づかれただろうか。

「遠い昔……5000年ぐらい前の世界ではね、男と女の恋愛がフツーだったんだって。

最近それに関する文献が見つかって。すごく面白そうでしょ！」

彼女はそう言いながら、陽だまりのように笑った。
今日の僕には、その笑顔が暑苦しく感じられた。

「……バイトがあるから帰るよ」

ここには居たくない。帰ろう。

彼女はまた、そつかあ、と言いついでに、じゃあねと付け加えて、
また話しに夢中になった。

白地に黒のラインが入ったトートバッグを肩にかけると、すばやく研究室を出た。

今日はバイトなんか無い。

駐輪場へ向かうと、エアバイクに駆け寄り、携帯端末をロックにかざして解錠した。

さっき彼女が話していた、異性愛についての話しが気になる。

僕は端末の画面に指を滑らせ、検索ページを開いた。

検索する言葉……『異性愛』と『文献』だろうか。

とりあえず、2つを思い浮かべると、すぐに検索結果が表示された。

『5250年前に、精神科医によって書かれた異性愛に関連する文

献が、9月26日に発見された。

現在、国立人間科学研究所にて研究が進められている。 記者 ミ
ツキ「ヨシカワ」

「国立人間科学研究所……」

冷たい響きのその名前を繰り返し口に出した。

行ってみたい。行って、その誰かに話を聞けば、僕のこのも
やもやを解消してもらえるかもしれない。

端末をハンドルにかざして、エアバイクのエンジンをかけ、跨っ
た。

フイイイ……とエアーの出る音がし、バイクはゆっくりと動き出
した。

そのとき、冷たさの混じる秋の風が吹いた。
とても心地良かった。

第2話 白い円柱（前書き）

投稿の仕方を間違えました（笑）

第2話 白い円柱

緑色の芝生の中にどん、と建つ、真つ白な円柱形の施設。
円い窓が一定の間隔でぽつん、ぽつんと着けられていて、砂利道
がガラスドアまで真つ直ぐに伸びている。

勢いで来てしまったものの、事前連絡もなしに中に入れてくれる
だろうか。

……無理だろう。

やっぱり帰ろうか、と思い、エアバイクのエンジンをかけようと
端末を取り出した時だった。

ガラスの自動ドアが無音で開き、中から人が出てきた。

老人というには少し早すぎる、きりりとした雰囲気男性だった。
研究者らしく、薄いブルーのワイシャツに、白衣を羽織っている。
僕がぼうつとしていると、彼はすたすたと近づいてきた。

「君は、どうしたのかな」

少ししゃがれたような、聞き取りづらい声だった。でも、不快で
は無かった。

「は、あの……」

僕は焦った。僕は話すことが苦手だ。

言葉を搜していると、彼のほうから話しかけてきた。

「一緒に来なさい」

黒縁のメガネの奥にある瞳は、優しい色をしていた。

「はい……」

僕は彼の背中を眺めながら、白い白い円柱に足を踏み入れた。

第3話 紅茶と研究者（前書き）

続きます。どうぞ

第3話 紅茶と研究者

カップの中の、綺麗な茶色い液体から、湯気がふわふわと立っている。

「これは、何ですか？」

僕は思い切って、研究者の彼に質問を試みた。

「紅茶という古代の飲み物さ。乾かした葉っぱに湯を注ぎ、その出汁を飲むのだ」

「コウチャ、ですか」

「そう、コウチャさ」

そう言うと、彼は僕の斜め左向かいに腰かけた。

「……さて、君の話を聴こう」

彼は手を組み、話を聴くぞ、という体勢を整えた。
話さなければ、と思うと、言葉が出づらくなる。
話さなければ。

「あ、あの僕は……」

「うん」

「お、女の子が好きなのです」

僕は前を見ていられず、視線を落した。
黒いジーンズに包まれた自分の膝が目に入る。

「それで、ここに来てくれたのか？」

「は、はい……文献が見つかった、と知ったので」

「そうか……」

研究者の彼は、自分のカップに視線を向けた。

前に映画で見た、占い師が水鏡を見つめているような、ミステリアスな雰囲気がただよう。

「昔は、異性愛が普通だったのですよね？」

沈黙に耐えられず、話しかけた。

「そうだね。文献を見れば、世界の多くの人間が異性愛者だった」

「でも今は……」

「異性愛は汚らしい行為だとして宗教でも禁じられている」

「なぜですか？」

僕は自分でも驚くほど、強い口調で言った。きつと顔を上げて。

「なぜ、汚らしいのですか？」

「……それは、わからない。でもそういうことになっている」

研究をしている人間でさえ分らないのか。僕は、全身の力がするする抜けていくのを感じた。

研究者の彼は、僕を諭すような、ゆっくりとした口調で言った。

「昔の同性愛者は、君と同じ事を考えていたのではないかな？」

「えっ」

「だって、そうだろう。5000年の時空を経て、立場が逆転しただけなのだよ。現代では、精子か卵子を自分で購入すれば、子孫を

作る事が出来る。それが最もノーマルなことになり、異性愛にこだわる事は意味が無くなったのさ」

……『異性愛にこだわる意味』。僕は彼の言葉を必死に処理しようと、脳に血流を集中させた。

彼は、僕が沈黙した事を気を悪くしたと勘違いしたのか、話題を変えた。

「君は、セックスをしたことはあるかい？」

あんまりにも唐突な質問に、僕はロダンの彫像のごとく固まってしまった。

「あ……ありません」

あるわけがない。好きな人に告白も出来ないのだから。
してみたい、とは思った。

彼女を抱きしめたい。独占して、触れてみたい。彼女の体のいたるところにキスをしてみたい。

「異性愛は悪い事では無いよ。君は、悪くない。同性愛も異性愛も普通のことなのだよ」

「でも、汚らしいことなのでは？」

「そんな、どこかの誰かが言った、適当な言葉に惑わされてはいけない」

「え？」

「君の気持ちに素直に生きなさい」

彼はニツと微笑むと、コウチャを飲み干した。

「おっと、そろそろ来客があるんだ」

「あの文献についてですか？」

「そうさ。新聞の記者がくるんだ」

「がんばってください」

僕は座ったまま、一礼した。

彼はハハハ、と笑うと、じゃ、君もがんばってと言って、席を立った。

部屋から出て、白い廊下を真っ直ぐ進むと、入り口のガラスドアから車が見えた。

多分、記者の車だろう。

僕は足早にドアからでて、エアバイクまで小走りで移動した。彼の言葉を反芻する。

「君は、セックスをしたことがあるかい？」

がんばって、の励ましの言葉よりも、何故か鮮烈に耳に残っていた。

第4話 自慰（前書き）

4話目です…！どつぞ

第4話 自慰

家に帰ると、吸い込まれるようにベッドに倒れこんだ。
布団を干したばかりなので、自分の匂いにまじって太陽の香りがある。

『君は、セックスをしたことがあるかい？』

彼の言葉をまた、思い出した。
そもそも、僕は男女のセックスの仕方を知らないのだ。
小、中学校の授業で、男と男、女と女のセックスの仕方は習った。
しかし、異性とのセックスは一切知らされなかった。はじめから
無かったことのように。

『同性との健康的な愛を育みましょう！』

ほんわかとしたイラストとともに、保健体育の教科書にはそう書かれていた。

僕はそれを見て、授業中にもかかわらず、泣いたのを覚えている。
わんわんと泣いたのではなく、静かに涙を流したのだ。一粒か二粒ぐらいだった。

「……」

変な事を思い出したせいかな、何もやる事が無いせいかな。
急にオナニーがしたくなった。

右手を股間に伸ばす。

ジーンズのチャックを下ろし、ボクサーパンツをかき分けて、勃起しはじめたペニスを取り出した。

暖かい。

自分のペニスに触れると、何故かいつも安心感を覚える。
彼女の裸体や匂いや唇を思い浮かべながら、僕はそれを弄った。

「……っ」

果てると、僕はまた、泣いた。
もう、どうでもいい、何もかも。

自慰の後は、いつもそういう気持ちになってしまう。
このまま部屋の中の空気に溶け込んで居なくなってしまうくらい。
る。

僕はのっそりと起き上がると、ティッシュボックスから1枚、2枚中身を引き抜き、いつものようにペニスと手を拭いた。
シャワーでも浴びよう。

洗面所に向かい、服を脱ぐ。

そのとき、不意に思った。

女とのセックスを体感したい。

想像ではなく。実感したい。

僕は素っ裸になると、バスルームに入った。

頭と体の火照りを冷ますため、冷水のシャワーを全身に浴びた。
明日、しよう。どうするのかはわからないが、絶対しよう。
シャワーの水が、涙の跡を洗い流していった。

第5話 ネオンと月（前書き）

5話ですー！どっぞー！

第5話 ネオンと月

空には銀色の月。

大地には、人を誘うカラフルなネオン。

女とのセックスを体感しなければ。

僕はそんな、強迫観念にとりつかれていた。

目的の店へ、真っ直ぐに歩く。

大丈夫、事前に調べた。悪質な店では無い筈だ。

端末で地図を見ながら、首をひねり、辺りを見た。

このエリアの建造物は、すべて黒で統一されていた。

代わりに、唇や女の裸体を象った、卑猥な看板が、競うように掲げられている。

「あそこか……」

見つけた。

魚の形をしたネオンライト。夜の深海を泳ぐ青い魚だ。

昨夜電話をかけたとき、男でも入れてくれるか聞いた。

女専用の店だからだ。

意外にも、電話にでた女はあっさり、『いいですよ、お待ちします』と言った。

黒い階段をゆっくり登る。

先には、赤いカーテンのかけられた、ガラスのドアがあった。

ふう、と息をはき、金色の取っ手を握る。そして、開けた。

「いらつしやいませ」

狭いカウンターに、40くらいのショートカットの女が座っていた。

「あ、あの……」

言葉が出ない。

「昨日の男の人でしょう？ ほら、早くドアしめてよ」

女は真っ赤な唇でそう言った。
薄く笑いながら。

「はい」

素早くドアをしめた。

「料金は前払い。70分、2万5千円」

「はい」

端末をマシンにかざし、2万5千円を支払った。

女は笑い、どの子にする？と言って、モニターパッドを差し出した。

誰でもいい。

僕は一番上の段の左端の女を、ペンでこっぴどタッチした。

「じゃ、行つてらっしゃい」

赤い口を歪ませて女は、白いドアを指差した。
行こう。

汗でぬれた手を握り締め、歩き出した。

第6話 深海魚（前書き）

6話目です……。どっぞー！

第6話 深海魚

白いドアを開けると、廊下があった。

その両側に3つずつ、またドアが並んでいる。

着き当たりには、白薔薇が生けられた花瓶がぼつんと置いてあった。

薄暗い照明。空気にはなんとなく、汗のような、人間の匂いが混じっているような気がした。

どの部屋に入ればいいのだろう。

立ちんぼうになっていると、後ろから声を掛けられた。

「ちょっと、どいてくれる？」

振り向くと、女がいた。

目と目の間が離れていて、その間には低い鼻がある。

魚類を連想させる顔だ。

「もしかして、私のお客さん？」

女は甲高い声で言った。

「あ……」

分からない。相手は適当に選んでしまった。

名前も良く覚えていない。

「まあ、いっか。行こう」

女は僕の手をとり、ドアの中へ誘った。

やわらかい手の感触。

どきり、とした。

その部屋の中には小さなベッドがあるだけだった。

長方形の箱の上に、安そうな、光沢のあるマットレスがしかれているだけだ。

下品な青い色をしていた。

「さ、はじめよう」

僕をベッドに腰掛させると女はかがんでシャツのボタンを外し始めた。

僕の乳首があらわになる。

「意外と、筋肉あるね」

「あ、あの」

「ん？」

女が顔を上げた。

瞳は、優しくだった。

「男とするのは、嫌じゃないの？」

女はぷつ、と吹き出した。

「結構いるよ、あなたみたいな人」

結構いるのか。僕は少しだけ、ほっとした。

「きみの名前は？」

「選んでくれたんじゃないのお？ ユキ、だよ」
「きれいな名前だね」

ユキは、ありがと、と言って笑った。

「口でしてあげるね」

僕はいつの間にか、下半身まで露出していた。

ユキは僕のペニスを口に含んだ。

「……」

初めての感覚だった。

暖かいと思った。

「……あ」

声が漏れてしまった。

「気持ちいい？」

「う、うん……」

「よかった」

笑った彼女の顔が、ハツキに似ているような気がした。
その瞬間、むっと吐き気がした。

「う……」

とっさに口を手で押さえる。

「どうしたの？ 大丈夫？」

ユキはペニスを口から離し、僕の顔を覗きこむ。

長い髪が、さらり、と肩から落ちた。

「ちょっと待って、水を持ってくる」

僕はうつすらと目を開け、全身に冷や汗をかきながら、彼女を見送った。

第7話 雪（前書き）

7話目です……。無い頭をフル回転させています。

第7話 雪

食道を、冷たい水が通っていく。
口の端から一筋、こぼれた。

「大丈夫？」

「うん……ありがとう」

僕が言つと、ユキは優しい微笑を浮かべた。

「……ごめん」

なぜだろう、急に申し訳ない気分になった。

彼女に迷惑をかけてしまったからか。

それとも、『仕事』の邪魔をしてしまったからだろうか。

「謝らないでよ。私がいじめてるみたいじゃない」

「ご、ごめん……」

ユキは笑つと、もういいよ、と言つて、僕の隣に座つた。

「……僕には、好きな人がいるんだ」

ユキには、話せそうな気がした。

「そうなんだ。……女の子、なんだよね」

「うん……そう」

「そっか」

僕はしばらく沈黙した。

「おおお、という空調の音だけが妙に、大きく聞こえた。

「……私のお兄ちゃんもね、女の子が好きだったんだ」

「えっ」

僕は顔を上げ、ユキの顔をじっと見た。

ユキの視線はうつろで、自分の足元を静かにとらえている。

「それで、今は、お兄さんは？」

「自殺しちゃった」

ユキは僕の顔を見て、痛々しく笑った。

「お父さんたちに付き合ってることがばれて。もう、会わないようにって。」

彼女と2人で死んじゃった」

「……」

どうしたらいいのだろう。

僕は分らず、ユキの髪に触れた。

ユキはびくつと反応したが、すぐに体の力を抜いた。

僕はさらさらとした髪に包まれた、ユキの頭を撫でた。

「……ありがとう」

「うん」

ユキは泣いていた。短い睫毛に縁取られた目を、涙でいっぱいにして。

泣きながら、彼女は言った。

「あなたは、幸せになれるよ」

どうしてだい、と僕は聴こうとしたが、やめた。

僕はユキが泣き止むまで、ずっとずっと、撫でる手を止めなかった。

最終話 愛の王国（前書き）

最終話です…このままだといつまでも続いてしまいそうなので、けじめをつけるために終わらせました。

読んで下さった皆様、ありがとうございました！

最終話 愛の王国

『あなたは、幸せになれるよ』

ユキの言葉が、僕を動かした。

止めどなく水が溢れる、大学講内の噴水。その横にそびえ立つ、女神像の前。

女神には、薔薇の木が鎖のように絡んでいる。

人は己の手で、運命の鎖を断ち切ることが出来るのだろうか。

彼女が歩いてくるのが、見えた。

僕は手を挙げ、こっちだよ、と示す。

ハヅキが微笑みながら近づいてくる。

今こそ伝えよう、僕の言葉で。

話すことが苦手な、僕の言葉で。

「君を、愛している」

僕らは。

幸せになれるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6326n/>

愛の王国

2010年10月21日02時42分発行